

## Contents

- 02 目次  
プロローグ Vol. 2
  
- 04 **特集 感染症対策**  
**日本の技術が命を守る**
  
- 06 備えと危機対応  
MISSION1 対策チーム  
MISSION2 制度構築  
MISSION3 研究開発  
MISSION4 人材育成
  
- 14 革新的な技術の開発  
SCENE1 国際共同研究  
SCENE2 企業との連携
  
- 18 早期発見を支える検査体制
- 20 感染症を防ぐ公衆衛生
- 22 特別授業 感染症対策と国際協力
  
  
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 2  
スリランカ
  
- 26 世界につながる教室①  
世界の今は“自分ごと”
  
- 28 地球ギャラリー Vol. 123 マレーシア  
写真・文●阿部雄介  
失われる森、共存の道は
  
- 34 教えて! 外務省  
知っておきたい国際協力③
  
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 読者の声、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol. 3



信頼で世界をつなぐ  
Leading the world with trust

# 病気の治療に 一番重要なこと

プロローグ  
Vol. 2

文●高野秀行



イラスト●中村知史

30年以上にわたって世界各地を旅しているが、深刻な感染症にかかった経験は2回だけで、両方ともマラリアだった。最初はフランスのパリ。正確にはアフリカのコンゴで感染し、日本へ帰る途中の経由地だった。パリで発症したのが、マラリア初心者の私にそんなことはわかる由もなかった。季節は12月。あまりに寒いので、安ワインを買ってラッパ飲みしながらセーヌ川のほとりをぶらぶらしていたら急に激しい悪寒に襲われた。「これはまずい……」と宿に戻ろうとしたのだが、どんどん足が動かなくなっていく。しまいには朦朧として宿の部屋にたどり着いた。熱を測ると40度近い。体がだるすぎて病院に行く気力もない。しかたなく、ガイドブックに載っていた「SOSなんとか」という救急医療施設に電話し、医者に来てもらった。しかしマラリア初心者は私だけじゃなかった。診断したフランス人の医者は「ただの風邪。これ飲みなさい」と風邪薬のシロップを渡して去って行った。

これがただの風邪？ 不審に思いつつ、甘ったるいシロップをスプーンにすくって飲んでいたら、症状は悪化するばかり。激しい下痢と嘔吐も加わって生きた心地がしない。二日後またSOSに電話して別の医師に来てもらったが答えは同じ。でも治らないのも同じ。さらに二日後、もう一度SOSを頼んだら、また新しい医者が来て血液検査をするなり、言った。「これ、マラリアじゃないか。どうしてこんなシロップなんか飲んでるんだ？」

それは私が言いたいセリフだった。もし悪性のマラリアだったらどうなっていたのだろう。

医者は最新のマラリア治療薬をくれ、それを飲んだら治った。といっても、体力の消耗がひどく、飛行機に乗って日本へ帰れるほど体力が回復するのに3週間ぐらいかかった。もう一度はミャンマーの山奥の村に住み込んだとき。畑で農作業をしているとき急に具合が悪くなり、村に戻ろうとしたが、足が鉛のように重くなっていく。自分の家に戻って体温を測ると見事に40度突破。そして激しい嘔吐と下痢。パリのときとそっくりだ。だが、その地域にマラリアがあるなど一度も聞いたことがなく、私は予防薬も治療薬も用意していなかった。

いったいこれは何だろう？ 風邪とは思えないが、と、思つて、村の人たちに訊くと、彼らは自信満々に答えた。「これは熱病だ！」。忘れていたが、この村では腹が痛い「胃腸病」、頭が痛い「頭痛病」と言う。つまり、すべて症状を指しているだけなのだ。

こんなところにいたら死ぬでしょうと思ひ、歩いて1時間ほどの、「医者がある」という大きな村へ運んでもらった。医者の家に着き、寝台に寝かされて待つっていると、主が現れた。私が「これ、見てください」と水銀の棒が極端に伸びた体温計を渡すと、医者はそれを見て驚愕した。「このきれいな棒は何だ!？」。

このときほど「もうダメだ……」と思つたことはない。しかも、医者「はしつこく、「ねえ、このきれいな棒はいつたい何？」と体温計の説明をせがむ。やめてほしい、40度の熱で苦しんでいる患者にそういう質問は。

あとでわかったのだが、彼は医者でもなんでもなかった。ただ月に1回、町へ行って薬を買ってきて、それを周囲の村人に売っているだけだった。

こんなところにいたら死ぬとまた思ひ、今度こそ、意を決して町に出た。通りがかつたトラックの荷台に乗せてもらい、悪路を揺られること丸1日、やっと町に着いた。そこには本物の医者がいた。診断は案の定マラリア。キニーネの点滴を打ってもらい、なんとか快復した。

こうしてふり返ると、私はマラリアよりむしろ、医者に苦しめられていたような気がする。病気の予防と治療には正しい知識が不可欠だが、正しい医者に出会うことはもつと重要だと痛感している。

高野秀行(たかの・ひでゆき)  
ノンフィクション作家。1966年、東京都生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒。同大探検部の活動を記した『幻獣ムベンベを追え』(集英社文庫)でデビュー。2006年『ワセダ三畳青春記』(集英社文庫)で第1回酒飲み書店員大賞を受賞。2013年に『謎の独立国家ソマリランドそして海賊国家プントランドと戦国南部ソマリア』(本の雑誌社)で第35回講談社ノンフィクション賞、第3回梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞。近著には『辺境メシヤバそうだから食べてみた』(文藝春秋)、『恋するソマリア』(集英社)、『間違う力』(角川新書)など。1992~93年にタイ国立チェンマイ大学日本語科で、2008~09年に上智大学外国語学部で講師を務める。